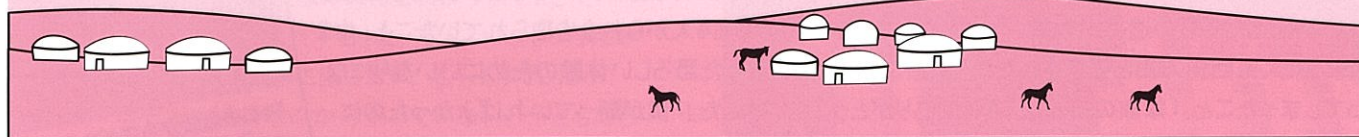


NewsLetter

vol. 6

シェルター「丘のいえ」だより③ ●
シンポジウム「いじめ自殺から子どもをまもる」レポート ●



パオの
現いま

シェルター「丘のいえ」だより③

彼女たちの「奇蹟」を信じて

昨年末、いつもパオのことを気にかけてくださっているタレントの矢野きよ実さんの書展が行われました。

初日に会場に行くと沢山の人でごった返しており、それでも矢野さんは一人一人に気さくに声を掛けられていました。気の弱い私は遠くから姿を拝んで帰ろうとしたところ、矢野さんが私を見つけて声を掛けてくれました（いやあ～緊張してしまいました）。

帰りに、会場で販売していた矢野さんの書の「奇蹟」と書かれたピンバッチを買いました。このバッチは、私が尊敬するRCサクセションの忌野清志郎さんが癌から復帰した際に付けたというものでした。

その夜、私は両親から激しい虐待を受けシェルター「丘のいえ」を利用していた女の子を車に乗せて、「丘のいえ」に向かっていた。彼女は、私にはあまり自分の気持ちを出すことはありませんでした。その彼女が突然、「幸せって言葉が自分には分からない」、「今まで自分は褒められたこともなければ、大切な存在と思われたこともない」と涙声で語り始めました。小雨の夜というシチュエーションが彼女をそうさせたのかも知れません。しかし、思わぬその言葉に、まだ10代後半の彼女が歩んできた壮絶な人生を思わずにはいられませんでした。私は彼女に、この日買った「奇蹟」のバッチを渡しました。彼女のこれからの人生に「奇蹟」が起きますように・・・などと柄にもないことを考えていました。

数日後、彼女が持ち歩いていた大きな財布（中味は入っていないのですが）をふと見ると、「パオ」バッチと「奇蹟」のバッチが付けられていました。

その後、彼女がいよいよ「丘のいえ」から旅立つという日、パオ宛に手紙をくれました。

「パオに入れてよかったです。パオの皆さんに出会えてよかったです。今までにない最高の出会いだと思います。今まで私が出会ってきた人たちは、そのときだけの出会いみたいな感じだったけど、今回は違いました。ちゃんと先もずっと見守ってくれる人たちに会いました。応援してくれる人たちに会いました。私にとってこれは幸せだったと思います。いい幸せを見つけました。これから先、また不安なことだらけです。仕事や生活はどうなるのかわなくななくて、正直めっちゃ泣きたいです・・・でも、私は逃げません。逃げたくないです。折角の出会いを台無しにしたくないです。これから先もよろしくお願いします。」

彼女は現在、新しい支援先にて、いろいろな人に力をもらいながら自立の道を歩もうとしています。壮絶な人生を歩んできた彼女です。これから大変な時期もあると思います。「丘のいえ」での生活も忘れる時期もあると思います。でも、彼女が自分を大切な存在と思えるような「奇蹟」は必ず起こると信じています。

現在、3人目の女の子が「丘のいえ」を利用しています。こうやって、子どもたちに安心できる場所を提供できるのも、パオを応援してくださっている皆様のご支援があってこそです。今後ともご支援をお願い申し上げます。（高橋直紹）

